岡山大学大学院教育学研究科研究集録　第138号（2008）19－32

自分と子どものかかわりから自己理解を図る保育授業の開発（第８報）

― 高等学校家庭科普通科目「家庭総合」におけるFlour Baby Project実践の検討（２）―

佐藤　園　・　平田美智子＊　・　河原　浩子＊

本報は，第７報で明らかにした岡山南高等学校「家庭総合」で試みられた“保育学習のまとめとして，学校のみで１日間実施された自分の誕生時の体重とは無関係なＦＢＰ”の課題（①ＦＢＰの位置づけ，②ＦＢの体重，③質問項目，④ディスカッションのテーマと進め方，⑤ＦＢＰによる人間関係理解の意味）を検討することを目的とした。そのため，課題②③④を第７報と先行研究の結果から設定し直し，同校の商業科「家庭総合」でＦＢＰ実践を行った。その結果，①自分の誕生時の体重のＦＢを用いた方が，生徒の獲得認識，特に「自己認識」が高くなった。また，今回用いた③質問項目と④ディスカッションのテーマと進め方により，前回よりも，カテゴリー別の生徒の獲得認識が高くなり，最終的に生徒は「これから家族や保育についてもっと学ぶ必要がある」ことを認識していたことから，①ＦＢＰは保育学習の導入として位置づける方が適切であることが示唆された。しかし，課題⑤に関しては，心理学的手法を用いてＦＢＰによる生徒の獲得認識を更に検討していかなければならないことが，今後の課題として把握された。

Keywords：高等学校家庭科，普通科目，授業開発，保育学習，
フラワーベイビープロジェクト

Ⅰ　はじめに

家庭科は，高等学校で他教科では代替できない「家庭生活を営む力」の育成を通して，学校教育の目的である生徒の人格の形成を達成する教科として位置づけられている。「教科」の独自性は，科学・学問を基盤とする法則・理論の系統的学習を原理とし，科学的認識の形成をねらいとすることにある。家庭科の学的基盤をなす家政学の「家庭生活の営み」の定義からそれを求めると，家庭科では，学習者である生徒自身が，人・狭義の環境・物からなる環境の三側面と主体的に相互に作用する力を育成して，はじめて家庭生活を営む力を保証することになる。したがって，家族・保育領域では，生徒と家族を中心とする人との関わりを通して，家族を中心とした生活を営む力を育成しなければならない。しかし，平成12年版高等学校学習指導要領に示された例えば，普通科目「家庭総合」の内容を見ると，生徒自身に関しては，「青年期の課題」が設定されてはいるが，その内容は一般的であり，自分自身や自分と家族を中心とする人との関係の理解には結びつき難いという問題を有している。

本継続研究は，この問題を解決する投げ入れ導入授業としてのFlour Baby Project（以下，ＦＢＰと称す）の開発を目的として，これまで①生徒の誕生時の体重にしたＦＢを，②養育ルールに従い，③学校・家庭で休日を含む７日間連続して世話をし，④１日の終了時には毎日の経験をBaby Journal（以下，ＢＪと称す）に記述し，ＢＪに設定された質問項目に答えると共に，⑤各自の経験をクラスディスカッ

岡山大学大学院教育学研究科　生活・健康スポーツ学系，700－8530　岡山市津島中３－１－１

Development of Early Childhood Education and Care Class that Enables Self-understanding from Relations between Child and I (8) : Examination of Flour Baby Project Practice in High School Home Economics General Subject “Katei So-go (Integrated Home Economics)”(2)

Sono SATO, Michiko HIRATA* and Hiroko KAWAHARA*
Home Economics Education, Division of Life, Health, and sports Education, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Okayama 700-8530
*Graduate School of Education (Master’s Course), Okayama University

ションにより共有し，テーマについて探求する実践と検討を段階的に行ってきた。[1)～8)]

現在は，必修家庭科でのＦＢＰの検討を「家庭総合」で行っており，前回の報告（第７報）では，岡山県立岡山南高等学校の「家庭総合」で「保育学習のまとめ」として“学校のみで１日間実施された自分の誕生時の体重とは無関係なＦＢＰ”[9)]の結果を，従来のＦＢＰと比較・検討した。その結果，①位置づけは「保育学習のまとめ」が適切か，②ＦＢを自分の誕生時の体重にして実践する，③学校での１日のみのＦＢＰ実施に適した質問項目を設定する，④ディスカッションのテーマと進め方の検討をする，という課題が明らかになった。[10)]

さらに，その分析結果を，日本家庭科教育学会第50回大会で報告した際に，⑤無機物のＦＢを抱くごっこ遊びを通して人間関係の理解を図ることにどのような意味があるのか，という質問がフロアーから提出された。本報告は，岡山南高等学校商業科普通科目「家庭総合」においてⅡに示す方法でＦＢＰを実施し，①～⑤の５点の課題を検討することを目的とした。

Ⅱ．岡山南高等学校普通科目「家庭総合」におけるＦＢＰの概要

１．普通科目「家庭総合」におけるＦＢＰの位置づけ

岡山南高等学校では，表１に示すように，平成12年版高等学校家庭科学習指導要領に基づく普通科目「家庭総合」の内容を，第２・３学年で各２単位開設している。

表１　「家庭総合」実施計画

（１）人の一生と家族・家庭	第２学年
（２）子どもの発達と保育・福祉	第３学年
（３）高齢者の生活と福祉	第３学年
（４）生活の科学と文化	第２・３学年
（５）消費生活と資源・環境	第２学年
（６）ホームプロジェクトと学校家庭クラブ	第２・３学年

前報で述べたように，この「家庭総合」の中で，2006年度からＦＢＰが実践されている。しかし，岡山南高等学校にＦＢＰを導入された砂田教諭の「ＦＢＰは，保育学習のまとめとするほうが効果的である」との考え[11)]から，表２に示すように「子どもの発達と保育・福祉」の最後の内容としてＦＢＰが位置づけられている。

表２　第３学年「家庭総合」年間計画表

子どもの発達と保育・福祉	子どもの発達 親の役割と保育 子どもの福祉 ＦＢＰ	１学期
高齢社会と福祉	高齢社会の進展と今後の展望 高齢者の生活実態と福祉	
高齢社会と福祉 衣生活の科学と文化	高齢者の自立と介護 衣生活の科学と文化 住生活の科学と文化	２学期
住生活の科学と文化	住生活の科学と文化 生活文化の伝承と創造	３学期

２．ＦＢ養育ルール・ＦＢの体重・ＢＪの質問項目・ディスカッションのテーマと進め方の検討

第７報で検討したように，岡山南高等学校「家庭総合」で実施された１日だけのＦＢＰ実践は，先行研究の７日間のＦＢＰ実践に比べ，保育学習の目的である「生徒の現在及び将来にわたる自己認識の形成」に直接関係してくると考えられる「自己概念」「家族の必要性」「自分の親に対する思い」を認識した生徒が少ないという問題が明らかになった。

前述したように，前回と同様の位置づけ・期間で実践されるＦＢＰで，これらを解決していくために，ＦＢの体重，ＢＪの質問項目，ディスカッションのテーマと進め方等について可能な範囲で再検討を行った。

（１）ＦＢ養育ルール

養育ルールについては，前回と同様の“学校でのみの１日間のＦＢＰ実践”であり，前回のルールを検討した結果，問題ないと考えられたため，表３に示す前回と同じルールを用いることとした。

表３　フラワーベイビー養育ルール

これから，あなたはフラワーベイビーの“親”になってもらいます。ベイビーを本当の赤ちゃんだと思って世話をしてください。この経験を通して，子どもの世話をするということの責任と子どもが育っていくために必要な環境について考えてみましょう。

ＦＢ養育ルール

１．１時間目から６時間目まで，あなたがベイビーの世話をすること。友達にベイビーを渡して世話をさせたり，育児放棄をしてはいけない。
２．誰のベイビーに対しても殴ったりひどい目にあわせるなどの虐待をしてはいけない。
３．体育や実習の時間などでどうしても世話ができないとき，１時間はベイビーに昼寝をさせてもよい。その場合，安全な場所にベイビーを寝かせておくこと。
４．プロジェクトの終了後，ベイビージャーナルを付けること。ジャーナルには，不満も含めて正直な気持ちを書くこと。

このルールを守るという約束として，自分の名前をサインしてください。
サイン：

（２）ＦＢの体重

第７報で述べたように，岡山南高等学校では，家庭に関する学科の専門科目「発達と保育」においてもＦＢＰを実施している。ここでの実践は，“自分の誕生時と同じ体重のＦＢ”を，“７日間，生徒が学校と家庭で，ルールに従い養育する”という先行研究と同じ条件で実施されている。しかし，普通科目「家庭総合」にもＦＢＰを導入するに当たり，砂田教諭は，専門科目と普通科目におけるＦＢＰの違いを，ＦＢの体重とＦＢＰの実施期間に見いだされた。その結果，「家庭総合」では，“自分の誕生時の体重とは無関係なＦＢ”を“１日間，生徒が学校で，ルールに従い養育する”ＦＢＰが実践されていた。しかし，先行研究の結果では，「自分の誕生時と同じ体重のＦＢ」で実践した方が，生徒の「自己理解」や「自分の親に対する思い」は深まっている。

今回の実践では，事前に教頭と教科主任に報告し，ＦＢ作成時に補助教員を導入できる商業科２組では，「自分の誕生時と同じ体重のＦＢ」を，補助教員を導入できない１組では，前年度のＦＢＰで生徒が作成していたＦＢから“自分の誕生時の体重に近いＦＢを生徒に選ばせて用いることとした。

（３）ＦＢ養育経験を通して生徒に答えさせるべきＢＪの質問項目の設定

表４　ＢＪの質問項目

Ａ　前回のＦＢＰで用いられた項目	Ｂ　今回のＦＢＰで用いた項目
	ＢＪ１
１．①あなたのベイビーは男の子ですか？女の子ですか？※ ②なぜ，あなたは，ベイビーにその性を望んだのですか？※ ③あなたはベイビーにどんな名前を付けましたか？※ ④どうしてその名前を付けたのですか？※	①あなたのベイビーは男の子ですか。女の子ですか。※ ②なぜ，あなたは“ベイビー”にその性を望んだのですか。※ ③あなたは，“ベイビー”にどんな名前を付けましたか。※ ④どうしてその名前を付けたのですか。※ ⑤自分の生まれた時の体重で“ベイビー”はあなたの腕の中にいますか？その体重は何グラムですか？ ⑥初めて“ベイビー”を抱いた時，どう思いましたか？ ⑦明日，どのような問題があなたの“赤ちゃん”とあなたに起こると思いますか？（大変だと予想されること）※ ⑧明日，“ベイビー”と過ごす１日で楽しみな事は何ですか。 ⑨あなたの“ベイビー”に親として責任を持った今，あなたはどんなことを感じたり，思ったりしていますか。※
	ＢＪ２
	⑩あなたの“ベイビー”と別れる時，どう感じましたか？※
２．①どんな時に，あなたは赤ちゃんを連れているのが難しいと感じましたか？　②それはなぜですか？（難しいと感じなかった人は，なぜ感じなかったのかについて書いて下さい）※	⑪どんな時にあなたは“ベイビー”をつれているのが難しいと感じましたか。それはなぜですか。（感じなかった人はその理由）※
10．フラワーベイビーの親になって，あなたが学んだ最も重要な事は何ですか。※	⑫“ベイビー”の親としてあなたが学んだ事は何ですか。※
	⑬あなたが，この１日に経験した事を，どんな面倒なことでもいいですから書いてください。※ ⑭あなたが“ベイビー”を抱いている時，「あなたの家族の事」やこれからできる「あなたの新しい家族の事」を考えましたか？それはどんな事ですか？ ⑮先日行った保育人形を抱いた時の感じと今日のあなたの“ベイビー”を抱いた時の感じには，どんな違いがありますか？それはなぜですか。
７．あなたは，親になる準備ができていると思いますか？※	⑯あなたは，親になる準備ができていると思いますか。それはなぜですか。※ ⑰今日一日“ベイビー”と一緒に過ごした感想をできるだけたくさん正直に書いてください。（マイナス面も含む）※
３．フラワーベイビーを育てるために，自分にはどのような要素が欠けていると思いますか？※ ４．フラワーベイビーの親であることのよい点と悪い点を挙げて下さい。※ ５．①もし，あなたが本当に10代で親になったとすると，どのような事を諦めたり，変えたりしなければならないと思いますか？②あなたは，それができますか？※ ６．もし，あなたが将来親になったとしたら赤ちゃんのためにどのような人生の目標を変えなければならないと思いますか？※ ８．あなたが独立しているとしたら，赤ちゃんの世話をしてくれ	

る人にどれくらいお金を払わなければならないと思いますか？家族は頼れません。1年間の費用を計算して下さい。（この事について，多くの経験を持っている大人の人から，この計算に対する助言を貰って下さい）※ 9．ベイビーの“親”になることを通して，感じた事や考えた事など，何でもいいので教えてください。※	

※は，先行研究である長岡大手高等学校「家庭総合」のＦＢＰで用いられたルール

第７報で述べたように，表４Ａに示す前回のＢＪの質問項目は，先行研究で７日間のＦＢＰ実践に用いた質問項目から抽出されており，質問項目８「ベビーシッターに支払う代金」のように１日間のＦＢＰ実践では答えにくい項目が多く含まれていた。前回の実践結果から，生徒が獲得し難かった「自己認識」「家族の必要性」「自分の親への思い」をＦＢＰを通じて生徒に考えさせるため，質問項目を表４Ｂのように設定した。

表４Ｂに示す今回のＦＢＰで用いた項目のうち，質問①②③④⑪⑫⑯は，前回も用いた項目である。新たに付加した質問⑦⑨⑩⑬⑰は，先行研究のＢＪで用いられてはいたが前回は採用されていなかった質問項目の中で，“学校のみの１日間のＦＢＰ実践”に不可欠であると考えられた項目である。また質問⑤⑥⑧⑭⑮は，これまでのＦＢＰでは用いられてはいないが，今回のＦＢＰ実践で生徒に考えさせる必要があるため，新しく設定した項目である。特に，岡山南高等学校では，毎年，保育の導入授業で，男女の協力の必要性と乳児を身近に感じさせるために，妊婦体験と保育人形を抱く学習を行っている。保育学習の導入で抱いた保育人形とまとめで抱いたＦＢの違いを生徒がどのように感じているのかを知るために⑮を設定した。さらに，前回用いた質問（表４Ａ）のうち，項目３・４・５・６・８・９は，１日間のＦＢＰ実践には不適切であると判断し，削除した。

以上の観点から設定した表４Ｂの①～⑰を，今回の実践でのＢＪの質問項目として用いることとしたが，生徒への指示のし易さとＦＢＰの実践結果を段階的に検討するために，「自分のＦＢの誕生直後に記入する質問項目①～⑨」をＢＪ１，「校内での１日のＦＢＰの実践後に宿題として記入する質問項目⑩～⑰」をＢＪ２，と区分してＢＪを作成した。

（４）ディスカッションのテーマ・進め方

ディスカッションに関しては，第７報で述べたように，前回は，生徒に表５Ａに示すテーマ１をグループ毎に話し合わせ，各グループの意見を３項目にまとめて板書させ，その板書を教師が読み上げながら気づいた点を付加した後に，テーマ３・４を生徒に記述させた。そのため，ディスカッション終了後の生徒の記述には，教師の価値観が含まれたものが多くみられた。

今回は，生徒個々人のＦＢＰ実践に基づく主体的なディスカッションを展開し，それを学級全体で共有・検討していきたいと考えた。そのため，表５Ｂのテーマ①をグループ毎に話し合わせ，各グループの意見を３項目にまとめ，各項目毎にカードに書いて黒板に貼らせ，それらを教師が生徒に確認しながらカテゴリー別に黒板上で整理した後，学級全体で集約して，ディスカッションを終えることにした。さらに，その後，前回用いた表５Ａのテーマ３の中で，生徒の記述が殆どみられなかった「子どもを持ち育てるということ」を削除し，②「親になるということ」をテーマに生徒に自由記述させることとした。以上の表５Ｂに示したディスカッションと自由記述のテーマ①②をＢＪ３として，生徒に配布するＢＪに加えた。

表５　ディスカッションのテーマ

Ａ　前回のＦＢＰで用いられたテーマ	Ｂ　今回のＦＢＰで用いたテーマ（ＢＪ３）
ディスカッションのテーマ	
１．ＦＢＰを実践して気づいたこと	①ＦＢＰを振り返って印象に残ったこと
ディスカッション終了後の自由記述のテーマ	
２．ディスカッションのまとめとして：話し合いをして「新たに気づいたこと」 ３．ＦＢＰのまとめとして：「親になるということ，子どもを育てるということ」	②「親になるということ」について書いて下さい。

３．ＦＢＰの実践内容

以上の「ＦＢ養育ルール」「ＦＢの体重」「ＢＪの質問項目」「ディスカッションのテーマ」に基づき，ＦＢＰを以下の内容で実施した。

（１）ＦＢＰ実践の対象者・実践者・期間

ＦＢＰ実践の対象者・実践者・期間は，表６に示すとおりである。実践は，岡山南高等学校家庭科非常勤講師平田美智子が担当した。

表６　クラス編成及び実施日程

クラス編成		生徒数（人）			授業実施日（2007年）		
		男子	女子	合計	ＦＢの誕生	１日間のＦＢＰ	ディスカッション
商業科	１組	13	24	37	6／12（水）	6／13（木）	6／19（水）
	２組	12	26	38	6／ 5（水）	6／ 6（木）	6／12（水）

（２）ＦＢＰの実践内容

１）実践前

①教員への事前説明：実施日に影響する他教科の教科担任に個別にＦＢＰの目的と内容を，全教員に対して職員朝礼で実施日程を説明。

②生徒への事前連絡：生徒には（ｉ）ＦＢＰの実施日程，（ii）“おくるみ”（バスタオル）の準備，（iii）ＦＢの名前を考えておくこと，（iv）自分の誕生時の体重を調べておくこと，を連絡。

２）「ＦＢの誕生」：１回目の授業（50分）

①生徒に記述すべきＢＪを配付し，ＦＢＰの趣旨説明を行う。

②養育ルールを生徒に提示し，これを守る誓約としてサインさせる。

③ＦＢの作成

・１組の生徒は，前回のＦＢＰで生徒が作成したＦＢの中から自分の誕生時の体重に近いＦＢを選ぶ。

・２組の生徒は，渡されたＦＢの小麦粉の量を調整することによって，自分の誕生時の体重のＦＢを作成する。

④生徒は，メインディングシートにマジックでベイビーの顔を描き，③のＦＢに貼ることで自分のＦＢを作成し，準備してきた“おくるみ”にくるむ。

⑤生徒は，ＦＢを“おくるみ”にくるんで抱いたまま，ＢＪ１の質問「自分のＦＢの属性」４問，「世話で予想されること」２問，「自分の体重について」１問，「親としての責任」１問，「出会ったときの気持ち」１問の計９問に答える。

⑥ＦＢと共に親子クラス写真を撮り，ＢＪを提出し，ＦＢを教師の保育所に預けて，「家庭総合」の授業（50分）を終える。

３）「校内でのＦＢＰの実践」：校内活動（１～６校時，休憩時間も含む）

①翌朝，登校後，生徒は保育所にＦＢを迎えに行き，１～６校時まで「養育ルール」に従ってＦＢとともに生活する。

②６校時終了後家庭科室にＦＢを返却する。

③宿題としてＢＪ２の質問「別れる時の気持ち，世話に伴う大変さ，親として学んだ事」各１問，「経験，感想」２問，「家族について」１問，「保育人形との違い」１問，「現在の自分の親としての資格」１問，計８問に回答する。

④翌日，ＢＪ２を提出する。

４）「ディスカッション」（１回目の授業の１週間後）：２回目の授業（50分）

①生徒は男女混合の３～４人の班になり，「ＦＢＰを振り返って印象に残ったこと」を話し合う。

②班での話し合いの結果を３項目にまとめ，カードに書き黒板に貼る。

③教師が黒板に貼られたカードを生徒に確認しながらカテゴリー別に整理し，学級全体で集約する。

④生徒は，ＢＪ３「親になるということ」についての自分の考えを記述し，ＢＪ３を提出し，ＦＢＰを終了する。

Ⅲ．岡山南高等学校普通科目「家庭総合」における“学校での１日間のＦＢＰ実践”の結果

１．ＢＪの記述にみる生徒の獲得認識

以上の実践結果を，表７に示す男子20名，女子45名，計65名の生徒のＢＪの記述から検討してみたい。

表７　ＢＪの提出人数

（人）

商業科	生徒数（ＢＪ提出者数）		
	男　子	女　子	合　計
１　組	13 (10)	24 (22)	37 (32)
２　組	12 (10)	26 (23)	38 (33)

（1）分析枠組の設定

前回の結果と比較検討するために，今回のＢＪ１・２・３の生徒の記述を，表８に示す前回の分析枠組みとして用いた「自分に関する認識（自己認識）」「ＦＢに対する愛情（愛情）」「自分の親に対する思い（親）」「子育てに対する責任（責任）」「世話に伴う大変さ（大変さ）」「家族の必要性（家族）」「養育態度の反省（反省）」「ＦＢＰの問題点（問題）」の８つのカテゴリーに整理した。その結果，表９に示す６カテゴリー41記述項目が得られた。以下，表９を分析枠組みとして考察を行いたい。

（2）ＢＪの記述全体でみた場合の獲得認識

表９に示した生徒の記述項目を，表８の前回のそれと比較すると，今回は，前回ではみられた「反省」と「問題」のカテゴリーに分類される記述がみられなかった。

しかし，ＢＪ全体の生徒の記述量は，前回よりも増えていた。

次に，ＦＢＰの時間経過に伴う生徒の認識の変化をみてみたい。

表８　前回のＦＢＰで用いた分析枠組

Ⅰ．自分に関する認識（自己認識）	**Ⅳ．子育てに対する責任（責任）**	**Ⅶ．養育態度の反省（反省）**
1．体力的につらい	19．子どものことを第一に考える	39．物のように扱った
2．経済力がない，働かないといけない	20．責任を持つ	40．雑に扱った
3．忍耐力が欠けている	21．遊びなどをあきらめて子どもと過ごす	41．あまり本気でかわいがれなかった
4．育児について勉強しないといけない	22．守る（大切にする）	42．大事にできた
5．自分が成長できる	23．育てる，しっかりとした人に育てる	43．目を離した
6．自分には育てられない	24．子どものために働く	**Ⅷ．FBの問題点（問題）**
7．育児できるか不安になった	25．育てる，愛情を持って育てる	44．泣かないから楽
8．自分がしっかりしないといけない	26．思いやりを持つ	45．動かないから楽
Ⅱ．FBに対する愛情（愛情）	**Ⅴ．世話に伴う大変さ（大変）**	46．動かない（暴れない）
9．かわいいと思った	27．トイレに行くとき大変	47．本来の苦労が分からない
10．愛着がわいた	28．片手しか使えないから大変	48．しゃべらない
11．寂しい・胸が痛い（別れる時）	29．重いから大変	49．感情がわかない
12．愛情を感じた	30．パソコンを打つとき大変	50．授業に集中できない
13．暖かい	31．食事をする時大変	51．実感がわかない
14．親しみを持てた	32．ずっと抱いていることが大変	52．ただもっているだけだった
15．癒される	33．教室移動が大変	53．子育てが不安になった
Ⅲ．自分の親に対する思い（親）	34．荷物を持つとき大変	54．関心がない人には意味がない
16．親の大変さがわかった	35．預けないといけないから大変	55．大切にしようという気持ちがわいてこない
17．母はすごいと思った	36．気配りしないといけないから大変	56．時々赤ちゃんを邪魔に感じた
18．親への感謝の気持ち	**Ⅵ．家族の必要性（家族）**	
	37．まわりの人の協力が必要	
	38．女の人にまかせっきりにしない	

表９　今回のＦＢＰの分析枠組

Ⅰ．自分に関する認識（自己認識）	**Ⅲ．自分の親に対する思い（親）**	**Ⅴ．世話に伴う大変さ（大変）**
1．育児について知識を学ぶ	15．親の大変さがわかった	29．トイレに行くとき大変
2．自分の赤ちゃんの時を考える	16．母はすごいと思った	30．片手しか使えないから大変
3．親になる準備をしていく	17．親への感謝の気持ち	31．重いから大変
4．自分も成長できる	18．自分を育ててくれた親の気持ちが分かった	32．パソコンを打つとき大変（授業中）
5．自分には育てられない	19．親は自分のことを大切に育ててくれた	33．食事をするとき大変
6．育児できるか不安になった	20．兄弟が生まれたときの親の苦労が分かった	34．ずっと抱かないといけないから大変
7．自分がしっかりする	**Ⅳ．子育てに対する責任（責任）**	35．教室移動が大変
8．今の自分は自分のことで精一杯	21．責任を持つ	36．荷物を持つとき大変
Ⅱ．FBに対する愛情（愛情）	22．育てる　しっかりとした人に育てる	37．預けないといけないから大変
9．かわいいと思った	23．育てる　愛情を持って育てる	38．気配りしないといけないから大変
10．愛着がわいた	24．思いやりを持つ	**Ⅵ．家族の必要性（家族）**
11．寂しい・胸が痛い（別れる時）	25．育児放棄はしない	39．新しい家族のことを考えた
12．愛情を感じた	26．虐待はしない	40．家族のありがたさを実感
13．優しい気持ちになった，暖かい	27．大切にする	41．お互い協力しながら育児に取り組む
14．親しみを持てた	28．育てられる自信がついてから親になる	

（３）ディスカッション前の記述（ＢＪ１・２）にみる生徒の獲得認識

１）ＢＪ１とＢＪ２の記述にみる獲得認識

ディスカッション前のＢＪ１・２の質問項目に対する生徒の記述からキーワード・センテンスを抽出し，それらを表９に示す６カテゴリーに整理したものが表10である。この生徒の記述の量的把握は，前回と同様の方法で行った。具体的には，表９に示すように，１カテゴリーに複数の記述項目があるが，例えば，ＢＪ１の質問項目①～⑨に対するある生徒の回答で，一つの項目につき，複数回の記述があった場合でも，一回としてカウントする方法で分析を行っている。以下，本報での量的把握は同じ方法を用いている。

表10　ディスカッション前の獲得認識

ＢＪ１		ＢＪ２	
① 大変さ	92.3%	① 大変さ	98.5%
② 責任	87.7%	② 愛情	92.3%
③ 愛情	66.2%	③ 自己認識	90.8%
④ 親	18.5%	④ 親	67.7%
⑤ 自己認識	10.8%	⑤ 責任	52.3%
⑥ 家族	1.5%	⑥ 家族	50.8%

ＦＢを抱いた直後（ＢＪ１）も，学校での１日間のＦＢＰを終えた後（ＢＪ２）も，第一に認識されていたのは「大変さ」であった。

ＢＪ１とＢＪ２で大きな差が見られたのは「責任」で，ＢＪ１では２位で87.7％であったものが，ＢＪ２では５位で52.3％と記述量が減っていた。それ以外のカテゴリーは，ＢＪ２の方が記述量が増えており，「愛情」「自己認識」に関しては９割以上の生徒が記述していた。また，ＢＪ１で，18.5％と1.5％であった「親」や「家族」に関する記述は，ＢＪ２では，それぞれ67.7％と50.8％となり，半数以上の生徒が「親」や「家族」に関して記述していた。

２）前回との獲得認識の違い

①認識の順位

ディスカッション前のＢＪ１とＢＪ２に生徒が書いた記述を合わせて表９の６カテゴリーに整理し，前回と比較したものが表11である。

表11　ディスカッション前の獲得認識の比較

前　回	今　回	
① 大変さ	① 大変さ	100.0%
② 自己認識	② 愛情	96.9%
③ 愛情	③ 責任	93.8%
④ 責任	④ 自己認識	90.8%
⑤ 問題	⑤ 親	70.8%
⑥ 親	⑥ 家族	50.8%
⑦ 反省	※問題・反省は記述なし	
⑧ 家族		

前回は，ディスカッション前に関しては，記述項目に着目しその量的把握を中心に分析を行ったために，カテゴリー別の量的把握はしていない。そのため，量的な比較をすることが出来ない。カテゴリーの順位をみると，１位「大変さ」に変わりはなかった。また，前回は５位と７位であった「問題」「反省」に関する記述は，今回はみられなかった。

「自己認識」「愛情」「責任」に関しては，前回も今回も２～４位となっているが，前回が「自己認識」→「愛情」→「責任」であったものが，今回は「愛情」→「責任」→「自己認識」と，順位に変動がみられた。しかし，今回の実践では，「愛情」「責任」「自己認識」に関して９割以上の生徒が記述をしており，量的にはこれら三つのカテゴリーの認識に差はないと言える。

前回の実践で記述が少なく問題となった「親」と「家族」に関しては，今回も順位的には５・６位と下位となっている。しかし，記述量をみると，「親」に関しては７割，「家族」に関しては５割の生徒が記述をしていた。

②認識の内容

次に，前回と今回の記述内容を比較してみたい。前回と今回ともに記述がみられた「自己認識」「愛情」「親」「責任」「家族」「大変さ」の６つのカテゴリーで，特徴的な記述を示すと表12になる。

表12　カテゴリー別にみた記述内容の変化（ディスカッション前）

カテゴリー	前　回	今　回（ＢＪ１・２）
自己認識	・体力的につらい ・経済力がない・働かないと行けない ・忍耐力が欠けている	・育児について知識が足りない・知りたい ・自分の赤ちゃんの時を考える ・親になる準備が出来ていない・準備をする
愛　情	・かわいい	・かわいい ・優しい気持ちになった
親	・母はすごいと思った ・親への感謝の気持ち	・自分を育ててくれた親の気持ちが分かった ・親は自分のことを大切に育ててくれた ・兄弟が生まれたときの親の苦労が分かった

責　任	・遊びなどをあきらめて子どもと過ごす	・育児放棄はしない ・虐待はしない ・大切にする
家　族	・周りの人の協力が必要 ・女の人に任せっきりにしない	・新しい家族のことを考えた ・家族のありがたさを実感 ・お互い協力しながら育児に取り組む
大変さ	・トイレに行く時大変 ・片手しか使えないから大変 ・重いから大変など	

これをみると，記述内容に変化がみられ，「責任」の記述に典型的に現れているように，前回は「あきらめて過ごす」などの義務的な表現に留まっていたが，今回は，「～したい」「～する」という主体的表現が増えている。

（4）ディスカッション後の記述（ＢＪ３）にみる生徒の獲得認識

1）分析枠組の設定

ディスカッション前と同様に，ディスカッション後のＢＪ３の質問項目に対する生徒の記述から，キーワード・センテンスを抽出した。それらを表９のカテゴリー別に整理したものが表13である。

表13　ディスカッション後の獲得認識

ＢＪ３	
①　大変さ	75.4%
②　自己認識	58.5%
③　愛情	56.9%
④　家族	56.9%
⑤　責任	50.8%
⑥　親	46.2%

ＢＪ３はＢＪ１・２とは異なり，自由記述であるにもかかわらず，多くの記述がみられた。

2）ディスカッション前後での獲得認識の比較

ディスカッション前に生徒が獲得した認識（ＢＪ１・２）をまとめ，ディスカッション後に獲得した認識（ＢＪ３）と比較したものが，表14である。

表14　ディスカッション前後の獲得認識（量）

ディスカッション前 ＢＪ１・２		ディスカッション後 ＢＪ３	
①　大変さ	100.0%	①　大変さ	75.4%
②　愛情	96.9%	②　自己認識	58.5%
③　責任	93.8%	③　愛情	56.9%
④　自己認識	90.8%	④　家族	56.9%
⑤　親	70.8%	⑤　責任	50.8%
⑥　家族	50.8%	⑥　親	46.2%

「家族」を例外として，全てのカテゴリーに関して，ディスカッション後の記述量が減っている。これは，ＢＪ１・２では予め設定された「質問項目」に生徒が回答したのに対し，ＢＪ３では「自由記述」の形式をとったためであると考えられる。

しかし，表15に示すように，記述内容には違いがみられた。ディスカッション後には，「親」では，「親への感謝」に関する記述内容が増え，「家族」では，将来の自分の家族だけではなく，周囲の人々や周りの環境づくりに関する内容がみられた。さらに，「自己認識」では，「勉強しなければいけない」「知識を増やす」など，現在の自分に不足しているものに対する記述が増えていた。

表15　ディスカッション前後の獲得認識（質）

カテゴリー	ディスカッション前 ＢＪ１・２	ディスカッション後 ＢＪ３
自己認識	・赤ちゃんを育てることは簡単なことではない ・子育ては大変だなあと考えた ・親になる準備がまだできていない	・保育のことをもっと男も勉強しなければいけない ・しっかりとした知識などを付け，準備ができてから親になる ・親になるまでにいっぱい赤ちゃんに対する知識を増やす
愛　情	・かわいいと思った ・自分の子どものような気がした ・別れるとき少し寂しかった	・別れる時に，寂しい気持ちになったのが自分でも不思議に思えた ・みんなに自慢した ・愛おしくなってきた
親	・親がどのような気持ちで自分を育てたのかを	・今まで親が愛を込めて育ててくれたことに感謝したい

	知りたい ・お母さんの気持ちを考えたい	・親の苦労と努力を実感することができた ・自分が幼いときにどれだけ親に苦労をかけたのかを知った
責　任	・勝手な行動はできない ・育児放棄をしない ・大切にしないといけない	・責任の重さを感じた ・中途半端な行動は許されない ・親になるということには責任がある
家　族	・女の人一人ではとても大変 ・将来の家族のことを考えた ・お互い協力して育児に取り組む	・いい環境の中でたくさんの人と協力して，育てたい ・私の両親も周りの人に支えられながら育ててくれたんだ ・育児の大変さや喜びは周囲の人みんなで分かち合うべきだ
大変さ	・重くて大変 ・授業中に大変 ・体力的に大変	・親になることは大変だということがわかった ・育児は大変なんだ

３）前報との獲得認識の違い

①認識の量

ディスカッション後の自由記述を前回と比較したものが表16である。

表16　ディスカッション後の自由記述の獲得認識

前　回		今　回（ＢＪ３）	
①　責任	47.8%	①　大変さ	75.4%
②　自己認識	41.3%	②　自己認識	58.5%
③　大変さ	21.7%	③　家族	56.9%
④　家族	17.4%	④　愛情	56.9%
⑤　愛情	10.9%	⑤　責任	50.8%
⑥　親	4.3%	⑥　親	46.2%

第７報で考察したように，前回の実践では，ディスカッション後には「問題」「反省」のカテゴリーに関する記述はみられなかった。今回も前回と同様に，「問題」「反省」に関する記述はみられなかった。

「責任」「自己認識」「大変さ」「家族」「愛情」「親」に関する記述を比較すると，前回の実践では，全てのカテゴリーに関する生徒の記述が５割以下であったのに対し，今回は，全てのカテゴリーの記述が増え，「親」を除いたカテゴリーが５割以上となっている。

特に，前回の実践で記述が少なく問題となった「親」は4.3％→46.2％に，「家族」は17.4％→56.9％に増えている。

②認識の内容

前回と今回の６つのカテゴリー毎の特徴的な記述を示すと表17になる。

表17　カテゴリー別にみた記述内容の変化（ディスカッション後）

カテゴリー	前　回	今　回（ＢＪ３）
自己認識	・自分もしっかりする ・自己中心的な心を捨てる ・努力が必要	・男も保育について勉強しなければならない ・親になる準備をしていく ・今の自分は自分のことで精一杯 ・親になるまでに赤ちゃんに対する知識を増やす
愛　情	・しっかりかわいがる	・愛情の量で子どもの人間性が左右されるのかと考えた ・自然に笑顔になれた ・別れるとき寂しいと思った自分が不思議だった ・小麦粉で出来た赤ちゃんでもかわいかった
親	・親のありがたみが分かる	・17年前に親にあんなに手をかけてもらっていたんだなあ ・親の気持ちが少し分かった ・自分の親を尊敬した ・産んで育ててくれた母に感謝したい
責　任	・子どものために犠牲になる ・子どもを犠牲にして 子どものために行動する ・自分のことは二の次になる	・親になることは責任感がとても重要 ・責任の重さを感じる ・育てられる自信がついてから親になる ・中途半端は許されない
家　族	・周りの助けが必要	・いい環境の中でたくさんの人と協力して育てたい ・家族やパートナーの協力が必要
大変さ	・親になることは大変 ・自分が思っていた以上に大変だった ・重くて大変　など	

表18　ディスカッションであげられたグループの意見

カテゴリー	1　組	2　組
大変さ	・重くて大変だった ・授業が受けにくかった ・体力的に大変 ・荷物を持つのが大変だった ・両手が使えないから不自由だった　など	・抱いておくのが重かった ・移動教室が大変だった ・トイレが初めて行きにくいと思った ・階段の上り下りが大変だった ・思った以上に手がつかれた　など
愛　情	・かわいい ・自分の体重じゃないけどかわいかった ・かわいすぎたので疲れを感じなかった ・自分の子どもが一番かわいく思えた ・守ってあげたいと思った　など	・愛着がわいた ・優しい気持ちになれた ・別れるとき寂しかった ・抱いている内に愛着がわいた ・いとおしい　など
家　族	・周りの協力が必要 ・周りの人が笑顔で対応してくれた	・一人じゃ無理 ・周りの人の助けが必要
親	・親の気持ちになって子育てについて考えることができた	
責任感	・親としての責任感	
自己認識		・今は無理

「大変さ」に関する記述内容は，前回も今回もほぼ同じであった。しかし，他の５つのカテゴリーをみると，前回は，「大変さ」に起因する記述が多くみられたが，今回は“家族の必要性”や“これから自分はどうあるべきか”，“育児について学びたい”“保育について学びたい”という記述に変わっていた。

２．「ＦＢの体重の違い」によるＦＢＰ終了時の獲得認識の差

「自分の誕生時の体重に近いＦＢ」を抱いた１組と「自分の誕生時の体重のＦＢ」を抱いた２組では，獲得した認識にどのような違いがみられたのだろうか。

授業でグループ別に「ＦＢＰを振り返って印象に残ったこと」についてディスカッションを行い，その結果を３項目にまとめてカードに記述して黒板に貼った。それらを教師が生徒に確認しながら，黒板で集約した結果が，表18である。

これをみると，「大変さ」「愛情」「家族」に分類された意見には，１組と２組では違いはみられない。

「自己認識」に関する意見は，１組ではみられなかったが，２組で「今は無理」という意見が提出されている。それとは反対に，「親」や「責任感」に関する意見は，２組ではみられなかった。これは，表６に示すように，ディスカッションの授業が２組の方が先に行われ，「親」や「責任感」に分類される意見が出なかったため，１組の授業で生徒がグループ別に話し合いをしている時に，実践者が意図的に「親や責任について」問いかけをしたためである。

以上のディスカッションを経て，ＦＢＰ終了時での各組別の獲得認識を表９の分析枠組みに従い，比較したものが表19である。

表19　「ＦＢの体重の違い」によるＦＢＰ終了時の獲得認識の差

1組（37人）		2組（38人）	
①　大変さ	100.0%	①　大変さ	100.0%
①　愛情	100.0%	①　責任	100.0%
③　責任	96.9%	③　愛情	97.0%
④　自己認識	90.6%	③　自己認識	97.0%
⑤　親	75.0%	⑤　親	75.8%
⑤　家族	75.0%	⑤　家族	75.8%

ＦＢＰ終了時の獲得認識を見ると，「大変さ」に関しては，１・２組の全ての生徒が記述していた。他の５つのカテゴリーでは，「愛情」を除くカテゴリーに関する記述は，２組の方が多くなっていた。

その中でも「自己認識」は，１組が90.6％であったのに対し，２組は97.0％と，より顕著な差がみられた。

１・２組ともに，「親」「家族」に関する順位は５位であり，他のカテゴリーに関しては９割以上の生徒が記述しているのに対し，１組75.0％，２組75.8％となっていた。

３．保育人形との違い

今回，初めて設定した質問項目⑮「ＦＢと保育人形の違い」に対する生徒の記述をまとめると表20のようになる。

表20　質問項目⑮「ＦＢと保育人形の違い」に対する生徒の回答

ＦＢについて	・自分の生まれた時の体重だし，自分が描いた顔のこともあって，とても親近感がわいた。 ・顔があり，名前があったから愛着があった。 ・自分が作ったＦＢだったので自分の子どものように感じた ・ＦＢを抱いているとさわり心地がよかったので安心した。 ・さわった感じが赤ちゃんのようだった。 ・リアルじゃないのに重さや抱き心地がＦＢの方が赤ちゃんに近いと感じた。 ・ＦＢの方が存在感があった。
保育人形について	・人形の方が抱きやすいと思った。 ・さわり心地を考えるとＦＢのほうがよいが，体のつくりとかは人形の方がよかった。

多くの生徒は，「自分の誕生時の体重で，自分が名前を付け顔を描いたＦＢは，柔らかくて手触りがよく，抱いているとなぜか気持ちが優しくなって，保育人形より愛着が持てた。」と感じていたことが分かる。

Ⅳ．高等学校家庭科普通科目「家庭総合」における“学校での１日間のＦＢＰ実践”の意義と今後の課題

第７報でも指摘したように，“学校での１日間のＦＢＰ実践”は，先行研究で実施・検討してきた“学校と家庭での連続した７日間のＦＢＰ実践”に比べると，「一人の家庭科教員で40名の生徒を対象に，２時間の家庭総合の授業と１日の学校内の活動のみでＦＢＰを実践できる」という利点を持っている。しかし，その利便性ゆえに，生徒が獲得できる認識と“学校での１日間のＦＢＰ実践”の限界を明らかにし，家庭科の学習に適切に位置づけて実践していかなければならない。換言するならば，第７報でも述べたように，学校の全教員の理解と協力が得られるならば，家庭科教師の誰もが“学校での１日間のＦＢＰ”を実践できる。しかし，その学習を“「楽しかった」「大変だった」という生徒の「体験」を重視する総合的学習で終わらせて満足するのか”，それとも“その生徒個々人の「体験」を出発点とする「経験」として家庭科の教科学習に位置づけていくことができるのか”では，同じ“学校での１日間のＦＢＰ実践”を行っても，生徒に獲得させる意味が異なってくる。このことは，家庭科の授業時数が削減され，「家庭総合」の貴重な時間を２時間割き，学校全体の協力を求め１日間のＦＢＰを行うということを考えるならば，重要な意味を持つ。

「はじめに」で述べたように，家庭科は「教科」として高等学校教育に位置づけられている。その意味は，他教科や学校外の非形式的な教育では学べない家政学を基盤とする法則・理論の系統的な学習を通して，家庭生活に関する科学的認識を生徒に育成することにある。[12) 13) 14)] これから考えるならば，本報の「はじめに」で述べた前回の実践から明らかになった①～④の課題，具体的には，「①ＦＢＰの位置づけ」とその実践で用いていく「②ＦＢの体重」「③質問項目」「④ディスカッションのテーマと進め方」は，生徒の「ＦＢをルールに従い，学校で１日間養育する」という行為を，単なる「体験」に終わらせるのではなく，それに意味を付与し，教科学習の「経験」としていくために不可欠なものとなる。しかし，「体験」を「経験」に昇華させていくためには，「ＦＢＰで生徒に何を獲得させたいのか」という「家庭科学習におけるＦＢＰの目的」から，ＦＢＰを的確に家庭科の年間指導計画の中に位置づけ，「どのようなＦＢＰの内容にするか」，例えば今回の実践で言えば「生徒に抱かせるＦＢの体重をどうするのか」「考えさせるべき質問項目はどのようなものが必要なのか」「どのようなディスカッションのテーマと進め方が適切なのか」を，実践を行う前に必ず前回の実践結果に基づき，検討し，決定してしていかなければならない。

これは，ＦＢＰ実践に限られたことではなく，「授業はこうすればよりよい認識が形成されるのではないか」という仮説を「学習指導案」として作成し，それに基づいて実際に授業を行い，実践の反省から仮説を修正し，新たな「学習指導案」を構成していく家庭科教師が日々の授業で必ず行っている行為である。森分孝治は，この教師の行う一連の行為は，実験的研究となっており，優れた教師はこれを自覚して行い，授業者としての資質を高めていると指摘する。[15)] このことは，家庭科教育学研究は，研究者のみが行うものではなく，実践者である教師も研究を行っていることを意味しており，それを日々の授業実践の中で自覚して行えるようになることが教師としての専門性と力量[16)] 形成のために求められていると言えるだろう。

以上の問題意識に立ち，前回の実践で明らかになった①～⑤の５つの課題の観点から，今回の実践を考察し，今後のＦＢＰ実践で検討すべき課題を把握してみたい。

１．課題③：学校での１日のみのＦＢＰ実施に適した質問項目の設定

今回は，前回の“学校での１日間のＦＢＰ実践”で生徒が獲得した認識から，用いられた質問項目を検討し，表４Ｂの質問項目①～⑰に設定し直して，ＦＢＰ実践を行った。その結果は，Ⅲ－１－（３）に示す通りである。具体的には，前回は記述が殆どみられなかった「親」や「家族」に関する認識を５割以上の生徒が獲得している。これは，前回は設定していなかった質問項目.「あなたが“ベイビー”を抱いている時,『あなたの家族の事』やこれからできる『あなたの新しい家族の事』を考えましたか？それはどんな事ですか？」を新設したことに起因していると考えられる。

２．課題④：ディスカッションのテーマと進め方

ディスカッションのテーマと進め方に関しても，前回の実践では，生徒が「ＦＢＰを実践して気づいたこと」をテーマにグループ別に話し合い，それを３項目にまとめて黒板に板書し，その板書の内容に教師が意見や感想を付け加えるディスカッションであった。そのため，ディスカッションが生徒が単にＦＢＰを通して自分が感じたことや考えたことを述べただけに留まり，ディスカッション後のＢＪをみても，教師の意見や感想がそのまま記述されていた。

今回は，Ⅲ－１－（４）で考察したように，ディスカッションのテーマを「ＦＢＰを振り返って印象に残ったこと」に変えてグループ別に生徒に話しあわせ，それを３項目にまとめて項目別にカードに書かせて黒板に貼らせ，教師が生徒に確認を取りながらカードを分類していくことでグループ別のディスカッションの結果を学級全体で類型化する方法を取った。その結果，生徒が獲得した認識は，「親」を除く全てのカテゴリーで５割以上となり，特に前回では殆どみられなかった「親」と「家族」に関してもほぼ５割の生徒が記述していた。また，各カテゴリーの記述内容も，前回は，単に「ＦＢの世話の大変さ」に起因する認識に留まっていたのに対し，今回は「自分が何をすべきか」という主体的な認識に変わっていた。

３．課題②：ＦＢの体重

前回のＦＢＰは，時間の削減や専門科目「発達と保育」の差を考え，自分の誕生時の体重とは無関係な重さのＦＢで実践されていた。しかし，今回は，補助教員を入れられるクラスでは「自分の誕生時の体重のＦＢ」を，補助教員を入れられないクラスでは，前回のＦＢＰで生徒が作成したＦＢの中から「自分の誕生時の体重に近いＦＢ」を用いて実践を行った。

その結果，Ⅲ－２で考察したように，家庭科の教科としての人格形成の目的に直結する「自己認識」に大きな差がみられ,「自分の誕生時の体重のＦＢ」で実践したクラスの生徒の方が「自己認識」が高くなっていた。

今回は，補助教員を入れられるクラスのみで「自分の誕生時の体重のＦＢ」を生徒に作成させた。しかし，先行研究で明らかにしているように，“前回のＦＢＰで生徒が作成したＦＢの中から，自分の誕生時の体重に近いＦＢを生徒に選択させ，そのＦＢの小麦粉を調整することで自分の誕生時のＦＢを作成する”という方法を採れば，補助教員を得られなくても１時間の授業時間で全ての生徒に「自分の誕生時の体重のＦＢ」を抱かせることは物理的に可能である。

さらに，今回の結果でも明らかになったように，「ＦＢの体重」が家庭科の目的に直結する「自己認識」の獲得を左右するならば，普通科目であっても「自分の誕生時の体重のＦＢ」でＦＢＰを実践しなければならない。もし，専門科目と普通科目におけるＦＢＰに「差」や「違い」を求めなければならないのであれば，それは,「ＦＢの体重」に求めるべきではないし，家庭科の学習としてＦＢＰを実施する以上，求めてはならないと言えるであろう。

４．課題①：ＦＢＰの位置づけ

上記２・３の結果から，表17にみられるように，生徒は今回のＦＢＰ実践の結果，自分の人格形成に繋がる「自己認識」において，“男も保育について勉強しなければならない”“親になる準備をしていく”“今の自分は自分のことで精一杯”“親になるまでに赤ちゃんに対する知識を増やす”という認識を得ている。この獲得認識から考えるならば，ＦＢＰは「保育学習のまとめ」としての役割を果たしておらず，むしろ「これから自分の問題として保育を学びたい」という生徒の意識を喚起してはいないだろうか。

先行研究でも明らかにしているように，今回の実践結果からも，ＦＢＰは保育や家族学習の導入として位置づける方が生徒にとって意味があると言える。

５．課題⑤：無機物のＦＢを抱くごっこ遊びによる人間関係の理解の意味

最後に，前回の実践に対する意見として提出された課題⑤について考えてみたい。

Ⅲ－３でみたように，生徒は，自分の誕生時の体重のＦＢに，保育人形より愛着が持て，抱いているとなぜか気持ちが優しくなったと記述しており，ＦＢを単なる「無機物」としては捉えていないことがわかる。

これまで考察してきた今回のＦＢＰを通して生徒が獲得した認識をみても，自分の誕生時の体重のＦＢを，学校の始業時から終業時まで抱き続けるＦＢＰが，その目的を達成するために設定された質問項目に回答し，ディスカッションを行うという学習活動によって，単なる「ごっこ遊び」に終始してはいないと言えるであろう。

また，例えば，母親の命とひきかえに低出生体重（1,350g）で誕生した女子生徒は，ＦＢの作成時に，教師と他の生徒に「なぜ，自分がこの重さで生まれてきたのか」を話し，ＢＪには「育ててくれた祖父母には感謝しまくりです。強い母親になりたいと思います。」と記述した。さらに，教師に「ＦＢを家に持ち帰り，是非，家族に見せたい」と申し出た。また，家族とのコミュニケーションが上手くいかず，生活指導で問題があった男子生徒は，ＢＪに「今まで，親が愛を込めて育ててくれたことに感謝したい。今までありがとう。ちゃんと責任のとれる家族を養っていけるような男になります。」と記述していた。このＢＪをクラス担任に見せた所，男子生徒の担任教諭は驚くと共に涙を流された。

これらから，ＦＢは，単なる無機物ではなく，ＦＢＰも生徒の中では単なるごっこ遊びとしては片づけられてはいないことが伺える。しかし，「このＦＢＰによって生徒が理解した人間関係にどのような意味があるのか」に関しては，本継続研究で行ってきた分析方法だけでは回答を見いだすことはできない。

６．今後の課題

以上，考察してきたように，前回と同様に「保育学習のまとめ」として「家庭総合」に位置づけられた“学校での１日間のＦＢＰ”の「ＢＪの質問項目」「ＢＪの体重」「ディスカッションのテーマと進め方」に，前回の実践結果から検討・修正を加えて実践した今回のＦＢＰで，生徒は，前回と同様の「大変さ」を感じながらも，前回よりもＦＢに対する「愛情」と主体的な「責任」を認識し，自分の現在から将来を考える「自己認識」を獲得していた。

家庭科の家族・保育学習の目的を達成するために不可欠な内容となる「親」や「家族」に関しても，殆ど認識が形成できなかった前回に比べると今回は改善されている。しかし，先行研究の“学校と家庭での連続した７日間のＦＢＰ実践”の結果と比較すると，未だ質・量共に充分であるとは言えない。これを保育学習のまとめとしての“学校のみの１日間のＦＢＰ実践”で解決しようとすると，「親」や「家族」を考えさせる質問項目を設定したり，ディスカッションを行う以外にない。

心理学者であるM.T.Greenbergらは，「青年中期のアイデンティ発達に影響を及ぼす文脈」の中で，「青年の親への愛着の性質は，仲間への愛着の性質よりも，青年期の自尊感情の諸側面に強い影響を与えるようである」と指摘している。[17] これから考えるならば，家庭科の家族・保育学習では，内容として「家族」や「親」を取り上げ，それを生徒に「考えさせる」だけではなく，生徒が「どのように親や家族を考えたのか」という「自分と親・家族との関係性の質」を問うことが，生徒のアイデンティの発達に重要な意味を持つことになる。

以上から考えるならば，修正を加えた今回の実践でも「親」や「家族」に関する認識が質・量共に不十分であったという結果は，“学校のみの１日間のＦＢＰ実践”の限界として解釈すべきではないだろうか。確かに，Ⅲ－２で示したように，ディスカッションにおいて，教師が「親」や「家族」に関して意見を求めれば，それなりに生徒は回答をする。しかし，それがどのような意味を持つのか。表19で示された結果は，先行研究の“学校と家庭での連続した７日間のＦＢＰ実践”に対する“学校のみの１日間のＦＢＰ実践”の限界であることを認識し，その不十分な部分をその後の家族・保育学習でどのように生徒に認識させていくのか，を考える方が意味があると思われる。

この問題も含め，ＦＢＰで獲得される“生徒のアイデンティの発達に重要な意味を持つとされる「自分と親・家族との関係性の質」”に関して，心理学的手法を用いて明らかにし，本報で答えが出せなかった課題⑤について検討していくことが，家庭科普通科目にＦＢＰを導入していく意味・価値を問うための新たな課題として把握された。

最後になりましたが，本報の趣旨をご理解いただき，非常勤講師平田美智子が商業科で行ったＦＢＰの実践結果を分析・公表することをお認めいただきました岡山県立岡山南高等学校の橘高知美教頭先生に心から感謝申し上げます。

引用・参考文献

１）佐藤園「アメリカ合衆国における教育改革と家庭科教育（第３報）－カンザス州のミドル・スクールにおける家庭科の実践－」，岡山大学教育学

部研究集録第118号，2001，69-84頁
2）佐藤園「ケア概念の獲得をめざす家庭科授業実践の試み（第1報）－大学生に対するFlour Baby Projectの実施結果－」，岡山大学教育学部研究集録第119号，2002，49-62頁
3）佐藤園・三浦聖子・原田省吾「自分と子どものかかわりから自己理解を図る保育授業の開発（第1報）－中学生に対するFlour Baby Projectの実践と検討－」，岡山大学教育学部研究集録第128号，2005，147-155頁
4）佐藤園・三浦聖子・佐藤ゆかり「自分と子どものかかわりから自己理解を図る保育授業の開発（第2報）－高校生に対するFlour Baby Projectの実践と検討－」，岡山大学教育学部研究集録第128号，2005，157-168頁
5）佐藤園・三浦聖子・佐藤ゆかり「自分と子どものかかわりから自己理解を図る保育授業の開発（第3報）－高等学校家庭科専門科目「発達と保育」におけるFlour Baby Projectの実践と検討－」，岡山大学教育学部研究集録第129号，2005，87－95頁
6）佐藤園・三浦聖子・佐藤ゆかり「自分と子どものかかわりから自己理解を図る保育授業の開発（第4報）－高等学校家庭科普通科目『家庭総合』におけるFlour Baby Projectの実践と検討－」，岡山大学教育学部研究集録第130号，2005，67－76頁
7）佐藤園・原田省吾「自分と子どものかかわりから自己理解を図る保育授業の開発（第5報）－中学校選択教科『家庭』におけるFlour Baby Projectの実践と検討－」岡山大学教育学部研究集録第131号，2006，57-63頁
8）原田省吾・佐藤園「自分と子どものかかわりから自己理解を図る保育授業の開発（第6報）－中学校必修教科『技術・家庭（家庭分野）』におけるFlour Baby Projectの実践と検討－」，日本家庭科教育学会中国地区会編『特色ある家庭科カリキュラム開発と授業研究』，2006，69-76頁
9）砂田裕子「『Flour Baby Project』を実施して」，岡山県教育委員会編『教育時報』第59巻10号，2007，32-33頁
10）佐藤園・河原浩子・平田美智子「自分と子どものかかわりから自己理解を図る保育授業の開発（第7報）－高等学校家庭科普通科目『家庭総合』におけるFlour Baby Projectの実践と検討－」，岡山大学教育学部研究集録第137号，2008，65－77頁
11）前掲書9）33頁
12）佐藤園「家庭科の本質（第1報）－平成元年版学習指導要領家庭科における家庭的資質育成教育－」，日本家庭科教育学会誌第44巻第1号，2001，3～13頁，
13）佐藤園「家庭科の本質（第2報）－『ティーン・ガイド（第6版）における家庭的資質育成教育－」，日本家庭科教育学会誌第44巻第1号，2001，14～24頁
14）「家庭科の本質（第3報）－家庭科における家庭的資質育成教育－」，日本家庭科教育学会誌第44巻第1号，2001，25～29頁
15）森分孝治『社会科教育学研究－方法論的アプローチ入門－』，明治図書，1990，12～13頁
16）小島弘道・北神正行・平井貴美代『教師の条件－授業と学校をつくる力－』，学文社，2002
17）J．クロガー著・榎本博明編訳『アイデンティの発達－青年期から成人期－』，北大路書房，2006，64～65頁